

2022 東北学院大学ボランティア実習生の感想文

教養学部言語文化学科 E. Aさん

今回、シニアネット仙台でのボランティア活動で、さまざまな人生経験を送り、豊かな知識を備えたシニア世代の方々と共に活動することで、人と関わることの大切さを感じることやボランティアの意義や役割を考えることができた。シニアネット仙台にはさまざまな活動グループがあり、一人一人が自分の興味のあることを見つけて取り組んでいて、非常に生き生きと楽しんで活動しているように感じた。毎回行く度に新しい人と出会い、自分の視野が広がるようなためになる話を聞くことができ、新たな発見や多くの学びを得ることができた。

監事の岩田さんのシニアネット仙台に対する思いや、大変だったことを聞いて、経営は大変だけれども存続し続けていきたい、守っていきたいという熱い思いを感じた。また、サロンのスタッフの方にお話を伺ったところ、辛い思いをして心が閉鎖的だったときに、シニアネット仙台に来て、人と関わったり、歌を歌ったりしたことで心の開放感を感じ、明るくなれて笑顔になったという話を聞いて、シニアネット仙台は孤独で辛い思いをしている方の救いとなる場所なのだと思う。さまざまな活動があり、どの活動も興味をもって活動することができ、シニア世代の方々もいきいきと活動していて、このような場所が人と人との繋がりが希薄化になっている今の社会にとって必要な場所だと感じた。

教養学部言語文化学科 O. Aさん

私はシニアネットでの活動を通し、生涯を通して人生の楽しむためのヒントを知ることができたのではないかと思います。ここで行われる活動は全て高齢者の方々の「やりたい!」という意欲に基づいたものだを知り、好奇心をもつことは人生を豊かにするということが感じました。活動されている方々は本当に生き生きと生きていて、こちら側がパワーをもらっているような気持ちになりました。私が特に印象に残っているのは、スペイン語の講座で参加者のみなさんが本気で習得しようと貪欲に学ぼうとしていたことです。私も大学でフランス語を学んでいるのですが、シニアの方々の新しいことを学ぼうとする熱量がすごく、私たちが負けていけないと思ったほどでした。人は何歳になっても学ぶことに大きな意義を感じるのだということを実感し、まだ学生の身である私は、今のうちから学習習慣を身につけ、人生を豊かにしていきたいと思いました。運営について、利益でなく人々の笑顔を見るためにやっているというお話を聞き、決して楽ではない状況の中で人のために続けていこうという姿勢が素晴らしく、コロナウイルスなどに負けずにこの場所は守っていくべきだと強く感じました。私が高齢者になった時も、シニアネットのように趣味を通して気軽に人とつながることができる場所があってほしいです。普段はなかなか関われない方と交流し、貴重な時間を過ごさせていただいたことにとても感謝しています。

教養学部言語文化学科 K. Kさん

今回シニアネット仙台にてオリエンテーションを含めた 8 回の活動を行い、ボランティア活動を通じてボランティアが対象とするもののイメージが変わった。

ボランティアが対象とするものとは活動を行う前は何らかの原因により通常の生活ができなくなった人であり、その方々の下で復旧のために活動をすることつまり困っている人の復旧までの手助けを行うことがボランティアの役目だと考えていた。しかしシニアネット仙台での活動から必ずしもそうではないと改めた。シニアネット仙台はシニアを対象とし、生きがいややるべきこと、するべきことを提供している。大事なことは困っている人ではなく、サークルの参加者と事務やサロンスタッフの方々双方がお互いを必要としているところにある。シニアネット仙台のような特定の対象に特化し豊かさの提供をする活動 NPO 団体は多いと思う。このような団体にボランティアが関わることもしょくないため、ボランティア活動の対象はもちろん生活困難者の復旧への手助けの場合もあるが、シニアネット仙台のように互いに支え合っている団体の場合もある。

最後にシニアネット仙台の活動を通じて NPO やボランティアが地域社会でどのような立ち位置にあるのかを少しでも感じ取ることができた。「シニアのための市民ネットワーク仙台」の関係者の方々には短い間の関わりだったのにもかかわらず質問やわからないことは何でも答えてもらえてとても良いボランティア実習になったと思います。ありがとうございました。

教養学部言語文化学科 S. Kさん

「シニアネット仙台」で開催されているサークル活動にボランティア学習者として参加した。活動前の認識で、高齢者のサークル活動の見守りのボランティアと思い参加したが、そうではなく、サークルの運営やサークルメンバーとしての直接参加であった。そのため、より多くの時間を高齢者と過ごす機会が得られた。高齢者の思いや考え方に少しは近づけたかと思う。例えば、「あしかび短歌会」で詠まれた短歌の申に「敬老は、遠い日のことこれからは、軽者なのではと思える日々」というものがあつた。この歌を詠んだ初ちゃんは、受けを狙っていたようで皆と笑っていたが、日常的にちょっとした事から感じ取っている軽視されているという感覚が表出したものではないかと考えることができた。古代史懇話会では、歴史の解釈のちがいを検証し合い、己の知見を深めようとしている意欲的な姿も見ることができた。これらの体験をとおし、これから自分がいかに社会の中で高齢者と関わるべきなのか考えていくきっかけが出来たボランティア学習だった。

教養学部地域構想学科 U. Wさん

「シニアのためのネットワーク仙台」のサークルや講座に参加する人は、名前の通り 60代から 80代の方々がほとんどでした。私自身、音楽が好きなため音楽系のサークルに参加する機会が多くありましたが、それらで使用する曲は世代に合わせた演歌や童謡、昭和歌謡曲などを採用しているため、同じ世代同士で懐かしい曲や知っている歌を歌うことで昔を振り返ることが楽しさや生きがいに繋がっていると考えていました。

しかし、「歌いましょう」という演歌を歌うサークルに参加した際、「大学生が聴いている曲、あるいはカラオケで歌っている曲を教えて欲しい」とお声がけ頂きました。よって、シニアの方々は、世代の違う若者の文化にも興味をもっていると実感しました。

私自信、アルバイトなどで異なる世代の方々と交流することで新たな知識や見方と出会い、視野が広がった経験があります。今後、シニアネットはシニアの方だけが集まるのではなく、学生ボランティアが交流していくことが求められているのではないかと考えました。以上のことから、私も授業期間のボランティア活動は終わっても積極的にボランティアに参加し、シニアの方々の生きがいづくりに、携わっていきたいと思いました。